

教員活動状況報告書

提出日：令和 5 年 3 月 3 日

所 属：生命・環境科 学部 臨床検査技術学科

氏 名：松下 暢子 職位：教授

役 職：

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

臨床検査総論 1、2 については臨床検査の基本的検査項目の内、主に尿検査、糞便検査、髄液検査などの一般検査の術式、検査結果と異常値が出た時の疾患との関連について臨床経験に基づき講義を行う。さらに臨床検査総論実習、衛生、公衆衛生実習については授業で行った内容を実践し、理解することを目指し、実習の指導を行っている。

科目名	学科・専攻	必，選， 自	配当年次	受講者数
臨床検査総論 1	臨床検査学科	必	2	88
臨床検査総論 2	臨床検査学科	必	3	83
臨床検査総論実習	臨床検査学科	必	3	83
衛生・公衆衛生学実習	臨床検査学科	必	4	80
総合臨床検査学演習	臨床検査学科	選	4	74
卒業論文	臨床検査学科	選	2~4	各 12
科学者・研究者論	環境保健学専攻	必須	1 年次	20 名
病理学	環境保健学専攻	選択	1 年次	1 名

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

臨床検査技師を目指す学生には、自らの学習によって得られる知識や技術がどのように社会に貢献できるのか具体的に理解することによって、学習の意欲を持続していける人材になってほしい。高齢化社会の現代において、検査を受けることなく過ごす人はいまや皆無に等しく、疾患の早期発見のみならず、予防医学の観点からも臨床検査の意義は重要性を増している。しかしながら医療の進歩は目覚ましく、卒業後、常に新しい検査法、治療法を理解し働き続けることは困難である。そのために、生涯にわたり学習を続けることができる基盤を大学生活において培う手助けができるよう心がけ、努力していきたい。さらに卒業後においても生涯教育の場を提供しつづける場所として大学が存在できるように教員として尽力していきたい。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

臨床検査を行うためには、分子生物学や生化学などの基礎医学の知識だけではなく、臨床医学の知識と理解が必要不可欠である。そのための基礎知識を学部教育で培う必要がある。そのための多くの授業をおこなっているが、それぞれの教科を理解するためには、学

生が自ら問題を見つけ、それを解決して理解することが必要であり、どこまで自分が理解しているかを客観的に認識する必要がある。しかしながら、授業をただ聞いているだけではそれを達成することは不可能である。そのため、授業中に小テストを行うことにより、各自の到達度を認識してもらう。さらに、授業や小テストで出している重要な項目を、さらに課題として出し、理解を深めてもらうようにしている。

アクティブラーニングについての取組

授業では内容についての理解が得られるように、さらに主体性をもって学ぶことができるように、授業の後半に授業内容に関連した問題について各自で取り組んでもらっている。それまでの内容を再度振り返ることによって、講義内容への理解と知識の定着を目指す。さらに、その後の問題解説によって、不足している部分を自主的に補うことができるようにしている。今後は小グループ学習にも取り組んでいきたい。

ICT の教育への活用

授業内容の定着を目指し、毎回の授業において、国試形式の小テストを行っており、その後、問題の解説を行っている。対面で登校してきた学生においては正答率で理解度を測っている。さらに、授業後には学理にあげた教材を活用して復習にあてている学生も多く見られている。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）（分量の目安：15～24 行（600 字～960 字））
現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

- ① 教育（授業、実習）の創意工夫（A～C） B
- ② 学生の理解度の把握（A～C） A
- ③ 学生の自学自習を促すための工夫（A～C） A
- ④ 学生とのコミュニケーション（質問への対応等）（A～C） A
- ⑤ 双方向授業への工夫（A～C） B

①から⑤まで

授業においては、臨床検査の概要について学ぶだけにとどまらず、検査の意義を理解するために背景にある疾患まで講義している。また現在の臨床検査を行うまでの病態の解明や検査方法の歴史などを複合的に紹介することによって理解を深めるよう努力している。さらに講義のみではなく、授業内に復習問題に取り組んでもらい、さらにその解説を行うことによって、理解が深まるように取り組んでいる。この復習問題への各自の取組を確認することによって理解度をはかることができる。さらに、毎回授業内容に関連した課題をだし、その課題についてのフィードバックは次回の授業の最初に行うことによって知識の定着を目指している。また、学生からの質問を授業後にうけており、講義内での疑問などについてはその時間内に解消できるようにしている。

⑥ 国家試験対策としてどのような取組をしましたか。

国試対策としては、2、3 年次における授業中の小テスト、期末試験においてすべて国試形式で行っており、早い段階から国試への取り組みを促している。さらに、4 年次においては、国試対策として傾向と対策をとりいれた授業を行うことによって理解を深められ

るように努力している。また、学生からの個別の質問に対しては、対面でもメールでも必ず誠実に、できるだけやる気を出させるように応じるようにしている。メールで来た場合は、どのような内容であれ早めの返信を行なっている。また、課題や小テストにおいても各学生の事情に応じた対応を行なっている。

5. 学生授業評価（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

学生が、予習復習を行いやすいように学理に教材、課題をあげ、毎週課題を提出さえ、また振り返りの小テストを毎行なった。

②①の結果はどうでしたか。

授業アンケートや質問においては概ね好評であった。

③②を踏まえて次年度はどのように取組めますか。

授業の内容と国家試験の結果においては相関がみられることから、より理解を深めるような授業を今後継続していきたい。

6. 学生の学修成果（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

国家試験に向けて3年次の授業終了時においてある程度の理解ができているかを確認するような総括的な試験を行い、それが国家試験においてどのように反映されていくのかを理解させるような試みを検討していきたい。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

病院実習を行いながら教材を復習しているという意見を聞き、今後も実習そして卒業後においても活用できる教材を作成していきたい。

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）（分量の目安：1～2行（40字～80字））

毎回、積極的に参加している。業務で参加できない場合は、後日、録画で確認している。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

臨床検査技師を目指す学生に自らの学習によって得られる知識や技術が今後どのように社会に貢献できるのか少しでも理解できるように授業をおこなっていききたい。そのためには検査の臨床的意義について疾患を中心に説明していき、さらには予防的観点からの意義についてもあわせて説明していききたい。その結果として国家試験の合格率を上げていききたい。また、生涯教育の場所としての大学の取組もおこなっていききたい。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

シラバス、小テスト、レポート課題、試験問題、教材（パワーポイント資料、授業内における復習問題とその解答を授業後に公開している）、授業評価コメント